オスプレイが強行配備された沖縄と私達

山本　英夫

久し振りに沖縄のことを書いてくれと、本誌編集部から執筆依頼を頂いた。沖縄（の人々）は安倍政権とどう向き合っているのかを知りたいようだが、私は沖縄を時々撮っているにすぎない。だから自分が適役か否かは疑問だ。敢えてお引き受けしたのは、今回の原稿依頼がタイムリーだからだ。

普天間界隈は危険が一杯

13年6月17日午後。私は佐喜眞美術館から宜野湾市役所前を経て、野嵩（のだけ）ゲートに向かう坂道を下っていた。15時頃、突如として、右側から転換モードのオスプレイが目の先を通過する。慌ててカメラを構えようとするが、25キロほどの荷物を担いでいた私は、望遠レンズを構えきれない。かといって、精密機械が入っているザックを投げ出すわけにもいかない（ムッ!!）。

ここは国道330号線。交通量はかなり多い。右側は住宅街だ。その上をオスプレイは普天間飛行場に向かって着陸態勢にあり低空飛行だ。ご存知の方も多いと思うが、オスプレイは、ヘリコプターのような、飛行機のような機体だ。飛行機のような形をしているが、滑走路を翼の揚力を利用して飛び上がれない。プロペラ、否、ローターが長すぎて、飛行機のような離発着をしたら、たちまちプロペラがペラッと飛び散り、アウト。離発着は必ずヘリモード（垂直モード）なのだ。だから必ずこのように転換モードからヘリモードになる。このオスプレイの飛行の「日米合意」は、住宅・市街地の上ではヘリモードは避けるとあるが、実態はこの通りだ。

2012年12月19日　普天間基地南西端の誘導搭と亀甲墓。45年6月沖縄戦の渦中、人家周辺を接収して基地が建設された。

また普天間基地と周囲の民間地の境は文字通り1本のフェンスがあるばかりだ。そのうえ、普天間基地はただの滑走路ではない。日本の航空法が適用されない、米軍演習場なのだ。滑走路に沿っての離発着ばかりか、前記のような縦位置からの離発着も日常茶飯事だ。

普天間基地は世界一危険な飛行場と云われているが、そこに危険なオスプレイが配備されたのだ。去る8月、昨年に続いて、もう1個中隊のオスプレイが配備された。計24機態勢だ。

オスプレイ追加配備渦中の事故

「オール沖縄」がオスプレイ配備を拒否している。反基地派ばかりか、自民・公明、自民内の「日本会議」のような右翼ですらだ。彼らの本心は他にあるにしてもオスプレイ配備反対、普天間基地撤去を主張しなければ沖縄では選挙で当選できないのだ。

しかし安倍政権は、昨秋の基地閉鎖の闘いや、昨年10月1日以降今日まで続けられている持続的なゲート前でのオスプレイ拒絶行動など、沖縄の政治的な意思を無視し続けている。こうして去る7月28日、米軍は新たにオスプレイ12機を岩国基地（埠頭）に陸揚げ。8月3日に2機、5日に残り10機の移動を予定した。しかし8月5日16時、米空軍嘉手納基地所属のHH－60ヘリ1機が宜野座村松田区のキャンプシュワブ内の山林に墜落・炎上した。東京のマスコミもこの情報を報道したようだ。私はその裏側を紹介したい。

私はこの日も朝から野嵩ゲート前で取材していた。残り10機の強行配備に反対する人と、それを封じ込めようとする機動隊、公安刑事でごったがえしていた。17時頃、もう今日の飛来はないよねと、辺りの気分が和らいでいたところへ、突然、「米軍ヘリが墜落の模様」の情報が抗議行動の主催者から伝えられた。時、17時5分。辺りは呆然、騒然。無論、この日、岩国からオスプレイは1機も飛ばな

2009年9月4日　朝日に染まる辺野古の海 ── この正面が埋め立てられ、基地が造られようとしている

かった。

この事態にヤバイなと舌打ちしたのは、日本政府と防衛省・沖縄防衛局だろう。しかし彼らは米軍に対して抗議のひとつもしていない。原因究明も口先だけだ。米軍は当日、翌日だけは空軍機の飛行を自重したが、7日から通常通りの飛行を始めた。当のHH－60の飛行も、原因究明を差し置いて、8月16日から再開したのだ。繰り返すが沖縄防衛局、防衛省、安倍政権は、米軍に対して抗議すらしていないのだ。

今回の事故は救難ヘリが訓練中に墜落したもようだ。詳細は明らかにされていない。墜落地点はハンセンの森の中だが、沖縄高速道路や近くの農地から約1・5キロ。人家まで2キロ弱。宜野座村民の水源である大川ダム（演習場の中）はすぐ隣だ。また、米軍は一旦、沖縄の消防署に救急車の出動を依頼しながら、ゲート前で消防車とともに立ち入りを拒否。無論、沖縄県警の立ち入りも拒否した。水源管理者である宜野座村水道課職員の立ち入りも一時拒否したほどだった。

繰り返すが日本政府は、事故に「遺憾」の一言でお茶を濁しているのだ。これが安倍政権の本領を遺憾なく発揮した姿だ。確かに日米政府は「お友達」なのだろうが、住民を無視したお友達関係は、身勝手すぎないか。

8月6日午後、私はこの墜落現場に近づくべく、バスを松田小学校前で降りた。案の定、CH－46ヘリがまだ消火活動をしていた。あのあたりかと見定めて進むと、丁度ゲート前で米兵が記者会見に応じていた。男性が海兵隊広報の大尉、女性は米空軍広報の下士官。彼らは、こうして速やかに記者会見に応じているのは「地域の安全」のためだと称しながら、「治外法権」ぶりをさらけ出したのだ。日本政府は04年8月の沖縄国際大学への大型ヘリの墜落・炎上事故後の今日まで、何も変えていないし、オスプレイの配備が進む中で、起こるかもしれぬ事故対応を考慮すらしていない。

この記者会見の中で、「消火活動に何故、オスプレイを使わないのか」を問うた記者に対して、大尉殿は、こう答えた。「オスプレイはオーストラリアで訓練中です」と。しかし12機のオスプレイのうち、出動中は9機であり、残り3機と、3日に新規到着した2機を合わせれば5機いたはずだ。さすがに、こうした場にオスプレイを使うのは、気恥ずかしかったのか。否。薄っぺらなごまかしで、済まそうとの魂胆だろう。

さて、何が問われているのか？

どうも迂遠な話に終始した。話は辺野古の埋め立て問題や、与那国の自衛隊の移駐問題にまで及ばなかった。しかし沖縄の人々が暮らしている空間と時間の中に多様な問題が押しかぶさっていることの一端をご理解いただければ、ありがたい。「オール沖縄」の中でも基地撤去まで押し通すのだという人は少数派である。やはり大多数の人は「日常」を生きている。「安全」でありたいとの願いを抱きながら。そこに金が絡む、金がつけ込む。

「安保」という政治を肯定している有権者が「日本」の中で相対多数を占める限り、こうした沖縄への不条理は変わらない。沖縄差別を変えることは出来ない。安倍が進めている中国を敵とした軍事・基地・意識の再編への私達「日本人」の危機感は、余りにも希薄ではないのか？　このままいけばヤバイぞというのが私の認識だ。辺野古への新基地建設も、与那国への自衛隊移駐も戦争のための物質的根拠となりかねない。基地・演習陸海空域と戦場が重なるのだ。今、私達は「満州事変」や盧溝橋事件を想起しておかねばならない時間を生きているようだ。（13年9月13日記）

【追記】私は来る10月から沖縄に居を移します。これまで大変ありがとうございました。また現地から発信していきます。再見。

（やまもと・ひでお／フォトグラファー。写真はいずれも筆者撮影）